



## 自他両用の漢語動詞に関する研究

著者	楊 ？郎
内容記述	筑波大学博士（言語学）学位論文・平成23年3月25日授与（甲第5597号）
発行年	2011
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/113036">http://hdl.handle.net/2241/113036</a>

氏 名 (本籍)	楊	高	郎 (韓 国)
学 位 の 種 類	博	士 (言 語 学)	
学 位 記 番 号	博	甲 第 5597 号	
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科		
学 位 論 文 題 目	自他両用の漢語動詞に関する研究		
主	査	筑波大学教授	博士 (言語学) 矢 澤 真 人
副	査	筑波大学教授	博士 (言語学) 杉 本 武
副	査	筑波大学教授	博士 (言語学) 坪 井 美 樹
副	査	筑波大学准教授	博士 (言語学) 那 須 昭 夫
副	査	筑波大学准教授	橋 本 修

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、自他両用の漢語動詞に関する研究である。従来、動詞の自他に関する研究は、和語動詞を中心に行われており、漢語動詞に関する研究は多くはない。特に漢語動詞には、自動詞用法と他動詞用法を併せ持つ自他両用動詞が多く、これを分析することは、自他論・ヴォイス論に寄与するところが大きいと考えられる。

本論文は、国語辞典とコーパスを用いた調査を通じて、自他両用の漢語動詞の実態を明らかにするとともに、自他両用動詞の使役化と受動化との関連に注目し、自他やヴォイスの観点ばかりでなく、アスペクトの側面からも分析を行い、現代日本語の漢語動詞の自他の実態を明らかにしようとする点で大きな意義がある。

本論文は、8 章からなる。

第 1 章では、本論文の目的と研究対象、研究の意義および各章の概要を示す。

第 2 章と第 3 章では、『岩波国語辞典』『学研現代新国語辞典』『明鏡国語辞典』の 3 つの国語辞典を対象に、自他両用の漢語動詞がどのように扱われ、実際にどのようなものが自他両用動詞と認定されているのか、調査を行う。同じ見出し語で自動詞と他動詞が併せ示される漢語動詞（漢語自他サ変動詞）は、異なり語数で 912 語にのぼること、それぞれの国語辞典の自他認定にかなり揺れが見られることを示す。また、従来の自他研究では、自動詞の主格と他動詞の対格が同じ深層格を持つ非対格構文と対格構文を軸に研究が進められてきたが、国語辞典における自他両用動詞には、自動詞の主格と他動詞の対格が同じ深層格を持つ動詞だけでなく、自動詞の主格と他動詞の主格が同じ深層格を持つ動詞も多数存在することを指摘し、この 2 種類の対応の存在が国語辞典の自他認定にズレを生じさせていると述べる。

第 4 章・第 5 章・第 6 章では、非対格構文と対格構文とに用いられる自他両用漢語動詞について検討する。

まず、第 4 章では、ヴォイスの対立の観点から、自他両用動詞には、従来指摘されていた他動性が強いタイプと自動性が強いタイプのほかに、「ガ自動詞」形・「ヲ他動詞」形とともに「ガ（他動詞）される」形と「ヲ（自動詞）させる」形がほぼ同様に見られる中立タイプがあることを指摘し、それぞれの比較・検討を行う。

(1) 自動詞性が強いタイプ：「半減する」「増加する」など

?? 原油生産が半減された／原油生産が半減した

アラブ産油国が原油生産を半減した／アラブ産油国が原油生産を半減させた

(2) 中立タイプ：「停止する」「中断する」など

車のエンジンが停止された／車のエンジンが停止した

太郎が車のエンジンを停止した／太郎が車のエンジンを停止させた

(3) 他動詞性が強いタイプ：「解決する」「分解する」など

問題が解決された／問題が解決した

太郎が問題を解決した／?? 太郎が問題を解決させた。

続く第5章では、「ヲ他動詞」形と「ヲ（自動詞）させる」形の双方が使える場合、自動詞性が強いタイプと中立タイプの「ヲ他動詞」形は変化の結果に注目した表現となり、「ヲ（自動詞）させる」形は変化の結果を含む過程に注目した表現になることを、「～ている」の意味と修飾成分との共起状況から示す。

第6章では、中立タイプの動詞と他動詞性が強いタイプの動詞が「～されている」形で用いられた場合にもアスペクト的意味の違いがあることを指摘し、中立タイプの動詞が「－過程性」「＋結果性」を持つのに対して、他動詞性が強いタイプの動詞は「＋過程性」「＋結果性」の性質を持つからであると解釈する。以上の第4章・第5章・第6章の分析から、中立タイプの動詞は、「ガ（他動詞）される」形から見れば、他動詞性が強いタイプと同じ性質を持つ一方で、「ヲ（自動詞）させる」形と「過程性／結果性」から見れば、自動詞性が強いタイプの動詞と同じ性質を持つことを指摘する。

第7章では、コーパスを用いて、自他両用の漢語動詞の実態調査を行い、国語辞典では912語もの自他両用動詞が登録されているものの、実例としては自動詞または他動詞のいずれかの用法でしか使わない動詞が多く、自動詞用法と他動詞用法がともに使われている動詞は359語（39.3%）に過ぎないことを示す。一方、実例調査でも、自動詞用法が多く使われる動詞と、他動詞用法が多く使われる動詞、自動詞用法と他動詞用法が均等に使われる動詞が存在することを確認し、第4章に示した自他両用漢語動詞に自動詞性が強いタイプと他動詞性が強いタイプ、中立タイプの三つのタイプが裏付けられることを示した。

第8章では本論文の成果をまとめ、今後の課題について述べる。さらに、【附録】を添え、自他両用の912語の漢語動詞と、それぞれの自動詞用法、他動詞用法、「される」形用法、「させる」形用法のコーパス上の用例数を表にして示す。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

自他の対が形態と結びつく和語動詞においては、「夜を明かす／夜が明ける」のような働きかけ性が希薄な動詞についても自他の判別をすることができるし、「柿に粉が吹く／柿が粉を吹く」のような和語の自他両用動詞についても、少数の特殊例として処置することもできる。これに対し、漢語サ変動詞はそもそも数が多く、自他に形態的な区別がないことに加え、自他両用に用いられる動詞も少なくない。漢語サ変動詞の自他に関する研究は、まず、実態の把握が望まれるのである。

本論文の著者は、漢語サ変動詞の自他を考察するに当たって、まず、国語辞典における自他認定の実態調査から取りかかり、国語辞典によって自他の認定がかなり揺れていることを示す。従来の研究では、典型的な例をもとに自他が論じられ、自他両用漢語動詞についてもどのように派生したのか、理論的な説明を試みたものもあった。しかし、これらの知見は言語理論としてはともかく、国語辞典という実用の場では、漢語動詞の自他認定を定めるのにあまり役だっていなかったと言える。著者は、国語辞典では、「夢が実現する／彼が夢を実現する」のような非対格構文と対格構文で対をなすもの以外に、「スターが共演する／スター

がミュージカルを共演する」のような、非能格的な構文と対格構文とで対をなすものをかなり自他両用と認定しており、これが国語辞典の揺れをもたらすことを指摘し、これにどのようなパターンがあるのか分析を試みている。本論文の特徴の一つは、着実な実態調査をもとに理論と実用との間を埋める情報を多数提供しているという点である。本論文の内容の一部は、すでに研究発表会や論文を通じて公開され、これをもとに一部の国語辞典では自他認定や意味記述の修正が行われている。学界だけでなく実用の場においても、本論文の記述の正確さと実用性が高く評価されていることを示す。

次いで、著者は、非対格構文と対格構文の対をなす自他両用動詞の使用実態の調査を行う。先の国語辞典の調査でいずれも自他両用と認め、かつ3年分の新聞データで100例以上出現し、かつ、「ヲ（自動詞）させる」形と「ガ（他動詞）される」形の合計が20例以上ある49語を対象に、「ガ自動詞」形・「ヲ他動詞」形・「ガ（他動詞）される」形・「ヲ（自動詞）させる」形を調査した結果、従来指摘されていた他動詞優勢タイプと自動詞優勢タイプのほかに、「停止する・中断する」のように自他両用だけでなく、「ガ（他動詞）される」形も「ヲ（自動詞）させる」形も用いられる中立タイプが存在することを発見する。これまで、「解決する・拡大する」などの動詞を例に、自他両用であっても「ヲ（自動詞）させる」形がないことを理由に自他両用動詞は他動詞から派生したとする見解と、自他両用であっても「ガ（他動詞）される」形がない「回復する・増加する」などの動詞があることから自動詞派生の自他両用動詞もあるとする見解とが出されていた。中立タイプは、「させる」形・「される」形の有無と自他両用動詞派生の解釈に再検討を促す存在と言える。

さらに著者は、「ヲ他動詞」形と「ヲ（自動詞）させる」形の比較を行い、両者に「～ている」形のアスペクト的意味の違いと、期間を表す修飾成分との共起状況の違いがあることを指摘する。加えて、「ガ自動詞」形と「ガ（他動詞）される」形にも「～ている」形のアスペクト的意味の違いが見られることを指摘し、これらには、過程性と結果性に関わることを示す。ヴォイス論とアスペクト論を結ぶ、注目される指摘である。

本論文は、実態調査に基づいて考察を進めることで、理論的な考察で見落とされてきた数々の現象を指摘することに成功している。しかし、示された実態を的確に説明することのできる統一的な理論の抽出には至っていない。自他論・ヴォイス論の新展開を促す、刺激的な知見に満ちているが、日本語における動詞の自他ないしヲ格の機能とは何か、という問題への追及が不十分なところも見られる。ただ、最初に述べたように、漢語動詞の自他に関しては、まずなにより実態把握が望まれている。いたずらに理論化を急がず、必要かつ十分な実態の把握を優先させるというのは一つの見識であり、統一的な理論の欠如をもって、本論文の価値がいささかも損なわれることはない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。